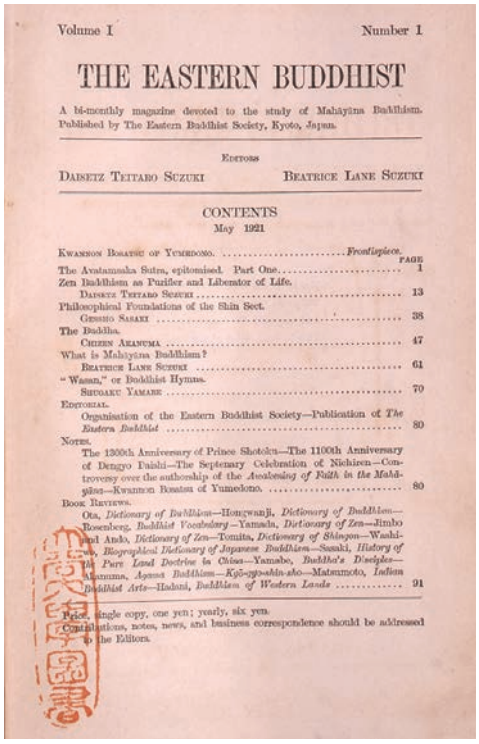
The Eastern Buddhist 創刊号に思う

教授　ロバート F. ローズ
（仏教学）

英文の仏教学雑誌 The Eastern Buddhist(以下EB誌と略称) が創刊されたのは 1921 年 (大正 10) の 5 月であった。この学術雑誌は響流館 5 階に事務所を持つ The Eastern Buddhist Society(東方仏教徒協会) の機関誌であるが、創刊当初から今日に至るまで欧米の仏教研究の発展に大きく貢献してきた。

創刊号の目次ページを見ると、そこには「大乗仏教の研究にささげられた隔月の雑誌」(A bi-monthly magazine devoted to the study of Mahayana Buddhism) と明記されている。この言葉から知られるように、EB 誌は当時欧米ではあまりよく知られていなかった大乗仏教について、英文で発信することが主たる目的であった。その誕生については、故坂本弘先生が「大谷大学時代の鈴木大拙先生」(上田閑照・岡村美穂子編『鈴木大拙とは誰か』、岩波現代文庫、2002, pp. 213-223) のなかで詳しく紹介されている。それによると、EB 誌の創設の背景には大谷大学三代学長の佐々木月樵と鈴木大拙の強い願いがあった。



Volume I　Number 1

THE EASTERN BUDDHIST

A bi-monthly magazine devoted to the study of Mahāyāna Buddhism. Published by The Eastern Buddhist Society, Kyoto, Japan.

EDITORS

DAISETZ TEITARO SUZUKI　BEATRICE LANE SUZUKI

CONTENTS
May 1921

KWANNON BOSATSU OF YUMEDONO. ..... Frontispiece.
PAGE
The Avataṃsaka Sūtra, epitomised. Part One 1
Zen Buddhism as Purifier and Liberator of Life.
DAISETZ TEITARO SUZUKI 13
Philosophical Foundations of the Shin Sect.
GENSHO SASAKI 38
The Buddha.
CHIZEN ARANUMA 47
What is Mahāyāna Buddhism?
BEATRICE LANE SUZUKI 61
"Wasan," or Buddhist Hymns.
SHUDAKU YAMABE 70
EDITORIAL.
Organisation of the Eastern Buddhist Society—Publication of *The Eastern Buddhist* 80
NOTES.
The 1300th Anniversary of Prince Shōtoku—The 1100th Anniversary of Dengyō Daishi—The Septenary Celebration of Nichiren—Controversy over the authorship of the *Avataṃsaka Sūtra* in the Mahāyāna—Kwannon Bosatsu of Yumedono. 80
BOOK REVIEWS.
Ota, *Dictionary of Buddhism*—Hongwanji, *Dictionary of Buddhism*—Rosenberg, *Buddhist Vocabulary*—Yamada, *Dictionary of Zen*—Jimbo and Ando, *Dictionary of Zen*—Tomita, *Dictionary of Shingon*—Washio, *Biographical Dictionary of Japanese Buddhism*—Sasaki, *History of the Pure Land Doctrine in China*—Yamabe, *Buddha's Disciples*—Akanuma, *Against Buddhism*—Kyō-gyō-shin-shō—Matsumoto, *Indian Buddhist Arts*—Hadani, *Buddhism of Western Lands* 91

Price, single copy, one yen; yearly, six yen.
Contributions, notes, news, and business correspondence should be addressed to the Editors.

The Eastern Buddhist　創刊号目次

鈴木は 1897 年 (明治 30) に渡米し、オープン・コート出版社の編集員として仏教書の英訳などに従事し、12 年後に帰国したときには学習院の教授に就任した。佐々木はすでに 1911 年 (明治 44) に、鈴木と共同で親鸞の伝記である『御伝鈔』の英訳を出版していたが、大谷大学を世界的な仏教研究センターにすることを夢見て鈴木を 1921 年に大谷大学に招聘した。そして二人は山辺習学、赤沼智善、ビアトリス・レーン・鈴木 (鈴木のアメリカ人妻) と共に東方仏教徒協会を設立し、EB 誌の発行に着手したのであった。

創刊号の目次ページにも明記されていたように、当初の予定では EB 誌を隔月に出版する計画であったようである。第 1 巻と第 2 巻では、その目標はほぼ達成されたが、第 3 巻からは年 4 回の発行になった。しかしビアトリス夫人の死去もあって、EB 誌は 1939 年 (昭和 14) の第 7 巻 3・4 号で休止した。その

後 1949 年 (昭和 24) から 1958 年 (昭和 33) にかけて第 8 巻第 1 ～ 4 号が出版されたが、1965 年 (昭和 40) にはニュー・シリーズ (New Series) として再スタートして、今日に至っている。

さて、EB 誌創刊号には 6 ページに渡る社説が掲載されている。その社説は、東方仏教徒協会の設立趣旨文と協会規約、そして “Eastern Buddhist” と題された創刊の辞ともいうべき文書によって構成されている。そこには、大乗仏教に関する学術研究の成果を公開すると共に、大乗仏教の精神を世界に広めることが EB 誌発行の目的であることが強調されている。

この社説では、大乗仏教は欧米では甚だしく誤解されていると指摘されているが、これは当時パーリ語仏典のテキストや翻訳が次々と出版され、南方仏教こそが釈尊の本来の教えを伝えるものであると考えられるようになり、大乗仏教は通俗的な信仰が混入した堕落した仏教であるという通念が、欧米で一般化していた状況を暗に批判したものであろう。このような大乗仏教に対する誤解を払拭するのが EB 誌の大きな目的であった。さらに社説では、大乗仏教は東洋の叡智であり、それが日本 (そして東洋) の美意識や道徳、あるいは思想に大きな影響を与えているので、その叡智を欧米に紹介し、西洋文化の発展に貢献することも、EB 誌に託された使命であると述べられている。そして最後に日本の仏教研究は、海外ではあまり知られていないため、それを英語で紹介することも重要な役目であるとされている。

このような目的を念頭に置き、創刊号では華厳経からの抄訳 (鈴木) を始め、禅仏教 (鈴木)、真宗の哲学的基礎 (佐々木)、釈尊（赤沼）、大乗仏教 (ビアトリス夫人)、親鸞の和讃（山辺）などについての論文が掲載されている。また雑誌の最後は覚書（notes）と書評で締めくくられているが、そこにも日本の仏教と仏教研究を世界に発信しようとする意気込みが看て取れる。覚書には聖徳太子の 1300 回忌、伝教大師最澄の 1100 回忌や、日蓮の誕生 700 年記念行事の記事に加えて、当時村上専精、望月信亨や常盤大定などによって激しく繰り広げられた『大乗起信論』の作者に関する論争（『大乗起信論』はインド撰述か中国撰述かという論争）も紹介されている。また書評には最近出版された学術書に加えて、7 種類の仏教辞典（その内 6 点は日本語のもの）を紹介しているが、これも日本の仏教研究の成果を欧米の学者と共有するとともに、日本の仏教学を世界にアピールすることを意図していることは明らかである。

冒頭で述べたように、EB 誌は世界の大乗仏教研究に一世紀近くのあいだ、大きく寄与してきた。その原動力は、創刊号で宣言された、大乗仏教を世界に開放したいという強い願いにあったのであろう。しかし毎年複数回、外国語の学術雑誌を発行し続けることは、多くの苦労があったことも忘れてはならない。今年の 4 月から EB 誌の業務は東本願寺宗務所から本学真宗総合研究所へと完全に移管された。そのような組織改編を機に、EB 誌が今後ますます世界の仏教研究に資することを期待する。

鈴木大拙とビアトリス夫人
（写真提供：鈴木大拙館）